



Data

監督・脚本: ジャック・オーディアール

原作: パトリック・デウィット『シスターズ・ブラザーズ』(創元推理文庫刊)

出演: ジョン・C・ライリー/ホアキン・フェニックス/ジェイク・ギレンホール/リズ・アーメッド/レベッカ・ルート/アリソン・トルマン/ルトガー・ハウアー/キャロル・ケイン

👁️👁️ みどころ

西部劇はジョン・ウェイン主演の古典的なものも面白いが、カンヌ常連のフランス人監督がはじめて挑戦した西部劇もかなり変わったもので面白い。

西部開拓史の時代、1848年1月に起きたゴールドラッシュは一躍サンフランシスコを大都会に変身させたが、それに巻き込まれた殺し屋兄弟も大変身！提督の命令に従って忠実に殺しの実行を？それとも、一見怪しげだが、意外に理性的で魅力的な化学者と結託してゴールデン・リバーへ・・・？

4人の男たちが織り成す欲を絡めた人間模様は、4人四様の達者な演技力もあってめちゃ面白い。古めかしい銃撃戦を味わいながら、古き良き時代の一風変わった西部劇を堪能したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■カンヌ常連のフランス人監督が初のウェスタンに挑戦！■□■

フランス人のジャック・オーディアール監督はカンヌ国際映画祭の常連で、『預言者』(09年) (私は観ていない) でグランプリを、『ディーパンの闘い』(15年) でパルムドール賞を受賞している(『シネマ 37』126頁)。『ディーパンの闘い』はタイトルとは全然異質のスリランカからの難民をテーマとした映画で、「偽装家族」となった難民一家の、「普通の家族」としての幸せ追求の姿を描く難解な内容だった。

そんなフランスが誇る巨匠ジャック・オーディアール監督がなぜハリウッドに進出し、初のウェスタンに挑戦！イタリアのセルジオ・レオーネ監督は1960年代に『荒野の用心棒』(64年)をはじめとする“マカロニ・ウェスタン”を大ヒットさせたが、フランスのジャック・オーディアール監督はパトリック・デウィットの原作『シスターズ・ブラザ

ーズ』を元に、ゴールドラッシュの時代を生きた4人の男たちのウェスタン劇を。

もともと、山根貞男氏（映画評論家）の新聞紙評では、本作は「見たことのない西部劇」と題して、「アメリカの俳優を中心とする正真正銘の西部劇だとはいえ、当然ながら、作品に流れる空気がアメリカ製ともイタリア製とも違い、そこが楽しめる。」「サスペンス西部劇というべきか。」と書かれている。

ゴールデンラッシュの時代が背景だからか、邦題は『ゴールデン・リバー』とされたが、原題は『THE SISTERS BROTHERS』。こう聞くと、英語の苦手な日本人は違和感を感じるが、単に主人公となる兄弟の名前がたまたま、兄がイーライ・シスターズ（ジョン・C・ライリー）、弟がチャーリー・シスターズ（ホアキン・フェニックス）というだけだから、要するに原題も原作も主人公となる2人の兄弟の名前をタイトルにしているだけだ。

■□■ゴールドラッシュとは？オレゴンvsカリフォルニア！■□■

1848年1月24日、サッターズ・ミルと呼ばれる場所で金が発見され、カリフォルニア・ゴールドラッシュが始まった。そのピークは翌1849年だ。英語でフォーティナイナー（49年者）と言えば、この年に金を求めてカリフォルニアに押し寄せた人を指すらしい。ちなみに、これはジョン・フォード監督の『荒野の決闘』（46年）の主題歌で、映画の原題である「いとしの「クレメンティン」」の歌詞にも登場する言葉だ。ペルーの日本来航は1853年だから、日本はまだ徳川の“太平の世”の時代だ。

私は小学生の時に1957年から放送されたTV西部劇『幌馬車隊』を見ていたが、隊長アダムスが率いる幌馬車隊が目指していたのはオレゴン。「隊長アダムスの指揮の下、ときには憎みまた愛し合う・・・」と歌われた主題歌は、いまでもよく覚えている。オレゴンには農業に適した肥沃な土地があったから、ゴールドラッシュ以前に、西海岸に移住すると言えば、カリフォルニアではなくオレゴンだったらしい。1937年の経済恐慌を契機として、1840年代にはオレゴン・フィーバーと呼ばれる現象が起き、オレゴンへの移住者が急増したそうだが。しかし、ゴールドラッシュによって人の流れは大きく変わり、本作が描く1851年のカリフォルニアは既に人口6万人以上の州に昇格しており（オレゴンはまだ準州のまま）、その繁栄はまさに旧約聖書で富と悪徳で栄える資本主義、偶像崇拜の象徴とされた“バビロンの都”のようだったらしい。

本作のパンフレットには、川本徹氏（名古屋市立大学大学院人間文化研究科准教授）のカリフォルニア・ゴールドラッシュについての面白い解説があるので、それは必読！

■□■シスターズ兄弟はなぜ殺し屋に？■□■

本作は第75回ヴェネチア国際映画祭で銀獅子賞（監督賞）を受賞した他、仏アカデミー賞（第44回セザール賞）では9部門にノミネートされ、監督賞を含む4部門を制し、リュミエール賞では作品賞を始め3部門を獲得した作品。したがって、何でも説明調の近

時の邦画と違い、冒頭から“サスペンス西部劇”らしく、提督（ルトガー・ハウアー）の命令によってシスターズ兄弟が“ある殺し”を実行する“説明なし”のシークエンスから始まる。それに続いて、彼らに与えられた任務は、連絡係のジョン・モリス（ジェイク・ギレンホール）が探し出す男ハーマン・カーミット・ウォーム（リズ・アーメッド）を始末することだ。そのため、今2人はとりとめのないバカ話をしながら、オレゴンからサンフランシスコへと南下していた。

日本でも幕末の時代は、坂本竜馬も西郷隆盛も徒歩で土佐や鹿児島から江戸まで移動していたことを考えると、シスターズ兄弟は当然馬での移動だが、アメリカ大陸は広いから、その移動は大変だ。もちろん、途中でホテルはないから野宿が当然だが、眠っている口の中に入り込んでくるクモをパクリと飲み込んで眠り続けるイーライの姿にはビックリ。翌朝、彼は下痢で体調が悪そうだったが、そりゃ当然だ。2人の兄弟の話を聞いていると、どうやら度胸があり提督からの信頼も得ている弟のチャーリーが仕事を仕切り、兄のイーライは弟のワガママをぼやきながら、身の回りの世話を引き受けているようだが、それはなぜ？また、バカ話だけでなくちょっと本音の話になると、チャーリーは自分の取り分を増やしながらかし屋稼業を続けることに意欲的だが、イーライはそろそろかし屋稼業から身を引くことも考えているようだ。すると、ひょっとして今後はこのシスターズ兄弟の間に路線対立も・・・？

そんな2人の力関係（？）と、2人がなぜかし屋になったのかについては、本作全編を通してじっくり演出されていくので、それに注目！ハッキリしているのは、“父親殺し”の罪を犯したことについて、2人とも大きな罪の意識を持っていることだが、そのことへのこだわり方や表れ方は大きく異なっている。さあ、そんな確執を抱えた中でのシスターズ兄弟の次の任務達成に向けての進路は？

■□■なぜウォームが狙われているの？提督の思惑は？■□■

かし屋のシスターズ兄弟が追っている獲物はウォームだが、提督がなぜウォームを狙っているのかについて、彼らは何も知らないらしい。それは、搜索係兼連絡係のモリスも同じだ。本作は全編にわたって“提督”という言葉が頻繁に出てくるが、その姿はラストに少しだけ意外な形で登場するだけで、ストーリーの中での“提督”はあくまでイメージだけの存在。しかし、その存在感は圧倒的で、いわば『ゴッドファーザー』（72年）における“ドン・コルレオーネ”のようなものだ。また、本作導入部は提督の命令を受けたシスターズ兄弟が、モリスを搜索係兼連絡係としながらかし屋を追う姿が描かれるが、提督がなぜウォームを狙っているのかについては観客にも全く説明がされないままだ。

したがって、本作導入部では、誰が何のために何を狙っているのかが少しわかりにくい。しかし、ある日サンフランシスコに南下していたシスターズ兄弟が馬で山を越えていた頃、モリスが金脈を求めて群れをなす採掘者の中にウォームの姿を見つけ出したところ

から、少しずつ人物像の骨格とその関連性が見えてくることになる。そして、モリスによるウォームの発見から2日後、ウルフ・クリークの町でモリスとウォームの会話が始まるが、それは意外にも打ち解けた友好的なものだったから、ビックリ。もっとも、この時点でのこれはモリスがウォームを安心させるための作戦で、ウォームと一緒にジャクソンビルへ砂金を取りに行くことになったモリスは、直ちにシスターズ兄弟に「急がれたい！」との手紙を送ることに。こうなれば、シスターズ兄弟によるウォーム殺しの実行はいよいよ秒読み段階に。

そう思っていると、本作中盤に交わされるモリスとウォームとの会話の中で少しずつウォームに心酔していったモリスは、何とシスターズ兄弟を裏切ることになるので、その展開に注目！

■□■シスターズ兄弟の生活感にも注目！■□■

ゴールドラッシュと言う時のゴールドとは砂金のこと。要するに、川の底に混じっている砂金を選り分けて採取するわけだ。しかし、アメリカは土地が広ければ、川も広くて長い。どこをどうすくったら砂金を発見できるの？金が発見される以前のサンフランシスコの人口はわずか千人程度だったが、金鉱への中継地として繁栄を遂げたサンフランシスコの人口は3年後には万単位に達していたというから、すごい。

ここでは、繁華街はもちろんホテルや売春宿も充実していた。したがって、何日も野宿を続けたシスターズ兄弟がホテルに泊まり、熱いお湯が入ったバスタブに浸るのは至福の時間だろう。ちなみに、本作ではイーライがチャーリーの髪の毛を切ってやるシーンとか、やっとう実用化した歯ブラシと歯磨き粉をイーライが物珍しそうに使うシーンも登場するので、そんな生活感にもしっかり注目し味わいたい。草履しか知らなかった坂本竜馬が西洋式のブーツやピストル、さらに写真撮影等を気に入ったのは有名な話だが、シスターズ兄弟のような荒野をさすらう孤独な殺し屋でも、やはり新しい文明への珍しさや憧れはあったわけだ。

そんな中、イーライの商売換えの構想も少しずつ膨らみ、サンフランシスコの町に着いたイーライはストアを開くのも悪くないなど考えはじめていたようだ。しかし、それも東の間、モリスからの手紙が届くと・・・。

■□■なぜ連絡系のモリスは科学者のウォームに心酔？■□■

西部劇に科学者が出てくる必要がないのと同じように、西部劇に社会主義者が出てくる幕はない。しかし、アメリカの西部開拓史やゴールドラッシュ物語の中には、どうやら科学者も社会主義者もいたらしい。

私は中学生の時の歴史の授業で、科学的社会主義を打ち立てたマルクス・エンゲルス以前に、空想的社会主義またはユートピア社会主義なるものがあったことを教わった。その

提唱者は、シャルル・フーリエ、アンリ・ド・サン＝シモン、ロバート・オウエンの3人だ。そして、この空想的社会主義を19世紀にヨーロッパから新大陸アメリカに持ち込んだのが、サン＝シモン主義者、フーリエ主義者たちだ。パンフレットにおけるリズ・アーメッドへのインタビューによると、サン＝シモン主義者が主張する理想的な共同社会では、人々は労働を分担し、平等に賃金を受け取る。結婚する必要はなく、ゲイでもストレートでも構わない。好きなものを追求し、みんなで幸せに暮らそうとする、そうだ。そんな理想的な共同体の実現を熱く語るウォームの前に、モリスはたじたじだ。そのうえ、「自分は化学者だ」と称するウォームは、川の中から砂金を採掘するについて、金を見分ける“予言者の薬”を作る化学式を発見したというから、こりゃいかにもインチキ臭い。しかし、彼の説明を聞いていると、それももっともらしく聞こえてくるからアレレ・・・。

カリフォルニアで金を求めるのは私利私欲のためではなく、そこで得た金を元手に理想的な共同社会をつくるため。そんな話を、人懐っこくかつ熱く語るウォームの魅力に油断したモリスは、ジャックソンビルの町でウォームに正体を見破られてしまったから、さあ大変。ところがそこで、提督が自分を狙うのは、自分から化学式を奪うため、化学式を教えるまで自分はシスターズ兄弟に拷問されるだろうと聞かされると、モリスは大きく動揺。そして、ウォームに心酔してしまったモリスは遂に提督とシスターズ兄弟を裏切り、ウォームと行動を共にすることを決心したから、以降事態は急転換していくことに。しかし、そうなると、モリスの裏切りを知らないまま彼の「急がれたし」の手紙によってモリスとウォームを追跡しているシスターズ兄弟は一体どうなるの？

■□■メイフィールドでは？サンフランシスコでは？■□■

本作は1人でハリウッド映画の主役を張ることができるビッグネームの4人が、それぞれ強烈な個性を放つ役を演じている。したがって、女優陣が入り込む余地が少なく、物語の途中では酒場の女（アリソン・トルマン）の他は、自分の名前をつけたメイフィールドの町を仕切る女ボス（レベッカ・ルート）が登場するだけだ。モリスの「急がれたし」の手紙を信じてメイフィールドの町までやってきたシスターズ兄弟は、メイフィールドがウォームの化学式を奪うべく部下を放ったと聞き、はじめてモリスの裏切りを知ること。メイフィールドの町では、これを機会に引退しようと持ちかけるイーライと、裏社会でトップに立つ野望を抱くチャーリーとの兄弟の本音の会話に注目したい。

本作の原作である『シスターズ・ブラザーズ』を書いたパトリック・デウィットは、パンフレットの中のインタビューで、「ウェスタンを書くことになったきっかけは？」の質問に対して「手始めに会話を書いてから、何の関連もないシーンをいくつか書いた。最初は兄弟ではなくて馬に乗っているただの2人の男だったんだ。2ページくらいで終わって思っていたら、そのうち15ページ、20ページと増えていった。そうなれば、作家としてはそれを完成させるのみだ。」と答えているところが興味深い。また「この映画は何を描こ

うと思っていますか？」との質問に対して、化学者役のリズ・アーメッドは、「欲望によって動いている世界や、お互いを引き離そうとする世界で、何らかの目的を見つけ、ほかの人とのつながりを通して目的を見出そうとすることは、とても難しいことだ。でも、それがいかに必要なことかを描いている。私たちが分断している社会の構造を打ち破り、人とつながることが、私たちが幸せでいられる唯一の方法だということだ。」と答えているから、その意味をしっかりと確認したい。

サンフランシスコに到着したシスターズ兄弟はやっとモリスとウォームの居所を突き止めたが逆に兄弟の到着を予測していたモリスとウォームに捕えられたから、兄弟の命は今や風前の灯だ。ところが、そこにメイフィールドの部下たちがウォームの化学式を奪うべく襲撃してきたから、やむなくモリスとウォームはイーライとチャーリーの縄を解き、銃を渡して共同してそれに応戦。そして、やっとのことでメイフィールドの部下たちをやっつけた4人は、ウォームの提案に乗って砂金を採るため手を組むことに。そして、その流れの中、何ともいえない魅力的なウォームの人柄と、川の中にある化学式で作った「予言者の薬」を流し、かき混ぜると砂金のある場所が光るので簡単に砂金を採ることができるという彼の奇妙な学説をシスターズ兄弟も少しずつ信じ込んでいくことに。

しかして、今日はやっとその準備万端が整った日。ウォームの指示では、人間の身体にこの液体が浸みると痛みを伴うので、洗い流しながら、薬を塗りながら用心深く金を探さなければならないとのことだったが、さあ、川にこの液体を流すと・・・。

■□■川がキラキラ光る中、人間の欲望もギラギラと！■□■

ウォームが発明した化学式による液体は、どうも硫酸系のものらしい。そのため、少量ずつ川の中に流し身体がヒリヒリしてくると川から出て水で洗い流し、薬を塗らなければならないわけだ。ところが、そんな知識のないモリスとイーライとチャーリーの3人は、液体の効果によって砂金のある場所の水面がキラキラ光り始めると大興奮。その下の土をすくったらたちまち砂金にありつけるのだから、それも当然だ。ところがそこで、人一倍欲の深いチャーリーは液をもっと大量に流し込めばもっと多くの金を発見できると考え、大きな容器ごと液を流し込もうとしたからアレレ。ウォームは慌ててそれを止めようとしたが、容器からの原液を右手に浴びたチャーリーは大火傷を負うことに。これでは、金の発見どころではなく、4人組はしょんぼりと現場を立ち去ることに。

他方、命令を無視したモリスのみならず、イーライとチャーリーもウォームと結託し4人組で独自行動に走ったことを知った提督は、この3人の裏切り者を射殺すべく新たな殺し屋を放ったから大変だ。

以降、この4人は金を求めて一攫千金を求めるところではなく、命そのものが風前の灯状態になってしまうことに・・・。

■□■最後に兄弟がたどり着いた所は？■□■

最近の『007』シリーズ等のスパイ映画の銃撃戦はズビード感がものすごいが、本作冒頭の銃撃戦は暗闇の中でパチンパチンと銃を撃つ音が鳴ると共にその部分だけが花火のように光るものだから、いかにも牧歌的。西部開拓史時代の銃の撃ち方はこんなものだったのだろう。ちなみに、宇田川幸洋氏（映画評論家）は本作についての日経新聞の評論で、その点について、「まるで打ち上げ花火のような音と、はげしい火花を発する発砲の描写が、おもしろかった。まだ、カートリッジ（薬莖）式でない時代の銃であることを誇張している。」と解説しているが、なるほど、そういうこと・・・。

右手の大ケガ（やけど）のため、結局、右手首全体を切り落としてしまった弟のチャーリーは、もはやまともな銃撃戦はできなくなってしまったから、殺し屋としては失格。兄のイーライと共に何とか提督が差し向けた殺し屋たちを返り討ちにできたのは幸いだったが、その後に兄弟が向かった先は？そこにはじめて兄弟の母親ミセス・シスターズ（キャロル・ケイン）が登場するから、それに注目しながら本作のラストはあなた自身の目でしっかり確認してもらいたい。

そして、前述した宇田川氏の評論によれば「ラストは原作と変えてある。」そうだし、「映画のサゲとして気がきいている。」そうだから、それも十分堪能したい。

2019（令和元）年7月13日記